

文学博士宝月圭吾君の「中世量制史の研究」に対する授賞審

査要旨

本書は中世日本における量制（枛）の実態と変遷とを考究したものであって、わが国社会経済史の研究に重要な礎石をおいた労作である。

由來、中世の社会経済では、米穀が多くの場合その中心的な役割を果たしたにもかかわらず、それをいかなる枛でいかに計量したかの問題は、複雑多岐な様相のまま、学者の究明するところとならず、今日まですておかれてきた。宝月圭吾君はこれを遺憾とし、広く全国にわたって零細な古文書を渉獵し、多年の研鑽の末、ついに本書を完成したのである。

本書は序章・終章と合わせて九章から成っている。

序章では量制史研究の歴史と古代の量制とを概観し、第一章にはいって「中世における古代量制の残存」を論ずる。ここでは「本斗」「国斗」「寮斗」「宣旨斗」などといわれた古代律令制の系統をひいた枛のことを論ずる。

第二章では「中世的量制の展開」を論ずる。中世の枛の代表は、庄園領主が租税の収納に使用した「庄斗」であつて、これは各庄園で別別の容積をもつものであつた。しかし各地に多くの庄園を所有する領主は、各庄園別別の枛では不便であるから、手許で統一的に計量し直した。それには「横斗」「倉斗」「政所斗」などと呼ばれた「領主斗」を用いた。これに対し寺院で行なう法会などで料米を配分するための枛として「下行枛」も発生した。そしてこれら

の枡の間の計量の差は「縮」と「延」のいずれかにあらわれた。収納枡や寺内枡に対する下行枡の「延」は、領主の利益に直接連なるものであって、「延」の存在は領主権力と量制との連関の問題として重視すべきものである。

第三章では「中世量制の崩壊過程」を論ずる。南北朝から室町時代にかけて、これまでの土地支配関係が急速に崩壊し、庄園領主の土地支配の力が衰えるに従って、量制にも大きな変化が生じた。「庄斗」が庄内における一円性を失って、庄内に発生した各種の職権に結びついた多くの私枡「職枡」が発生した。この「職枡」には「地頭職枡」「名主職枡」「作職枡」などの各種のものがあつた。同一耕地について本所・名主・作人などの得分が、それぞれ別の枡で量られる有様であつた。このような量制の紊乱は別の見方からすれば、通用対象の局限された「地域枡」の発生、その矮小化であり、また職権所有者個人の専用枡の発生、「個人枡」の発達となる。そしてこの趨勢がさらに進んで枡以外の容器をもって枡にかえる「代用枡」まで出現した。これに伴つて斗升の単位間の不規則累進が顕著になり、十三合乃至十四合で一升となる一升枡がある一面、三合で一升となる一升枡があり、四升で一斗とか、八升で一斗とかいう一斗枡も使用された。

第四章では「枡の形態と構造」を取り上げる。平安時代から鎌倉時代までにもっとも普遍的な枡とせられたものは一斗枡であつたが、これに対して「斗子」と称する一升枡が鎌倉時代中期頃から行なわれた。枡の形状は縦横同長で深さの浅い箱形が普通であるが、時に長方形のものもあり、一斗枡には円筒形のものが多かつた。そして口縁上部の磨滅を防ぐために鉄板を張つた「金伏枡」、竹片を張つた「竹伏枡」も行なわれたが、竹には厚さがあつて、これを張ると容積が増したので、「竹伏枡」をめぐる領主と農民との間に争論の起きたこともあつた。

第五章では「斗概と計量法の諸問題」について説く。斗概は古代には用いられたが、中世では領主の利益の擁護のためにこれを用いず、山もりに量ることがしばしばであった。また斗概を用いても、その一面に特別のくりこみを作り、両面を使いわけて容量に差をつけたり、掻き方に工夫をこらして容量を加減したりした。また誰が計量するかも問題であったが、中世末期に農民勢力が擡頭するとともに計量の主導権は次第に農民に握られて行き、農村の中から計量を専門とする「枅取」が発生し、その座として「計手座」も出現した。

第六章では「中世量制より近世量制への展開」を論ずる。室町時代に量制の混乱はその極に達したが、その中から統一的な量制への萌芽が生じた。その第一は「判枅」の出現である。「判枅」とは枅を作り枅の使用を命ずる支配者が自らの花押を枅において枅の權威を示したものである。支配権力を失った庄園領主がその權威を維持しようとして南北朝頃からこれを用い始めたが、庄園を侵略して領国の封建的支配を目ざした守護大名や、それより進んで分国内の一円支配を完成した戦国大名が多くこれを用いた。第二には中世末期の商業の発達に促されて、各地の市場に用いられた「商業枅」が、商品経済の発展、商業圏の広域化に伴って通用圏を拡大し、基準枅的な地位を占めるに至った。第三に、乱脈をきわめた斗升合の不規則累進が漸次清算せられ、枅制本来の十進法に統一されるようになった。とくに「商業枅」では相場の適正を保つため枅の定量化が要求され、「十合枅」が多く取り上げられ、標準枅とされた。中世末期の「十合枅」の容積は、京都で現在の一升よりやや小さく、奈良で約八合三勺であった。

第七章では「近世的量制の確立」を論ずる。織田信長や豊臣秀吉によって行なわれた検地は近世の集権的な封建政治体制の基盤として重要なものであったが、量制もそれに伴い全国的統一化への道に進むことになった。元龜年間か

ら従来の十合枅にかわって「京枅」の名があらわれるが、それは信長の制定した公定枅と思われる。その京枅の容積は現量の九合六勺四撮ほどであった。近世初頭封建諸侯はいずれも領内の枅の統一に苦心したが、徳川家康も早くから量制への関心を示し、江戸に入部したのち、江戸と京都の両地に枅座を開き、枅の製造販売に当たらせた。そして寛文年間、江戸枅を京枅に改めて、現量一升と等しくし、江戸市中に通用させ、諸藩にも枅座で製作した新京枅を画的に使用することを命じた。このことは中世量制の整理統合の最終的な措置であり、江戸時代はもとより明治・大正・昭和にかけ長く行なわれた公定枅の基を定めたものである。

以上は本書の梗概であるが、宝月君が錯雑をきわめた中世量制の実態を分析して、その変遷を社会経済の発達との緊密な連関のもとに見事に整理叙述した努力は高く評価せらるべきであろう。未開の荒野に荆棘をおしわけて一道の坦路を開いたともいふべき業績であると考えられる。